

編集後記

『人間科学研究』第3巻第2号をお届けします。平成19年4月の人間科学部の開設と人間科学会の発足から、石の上にも3年を終えようとしています。

今号は、学術講演会の抄録2件を巻頭に掲載しました。1件目の「どちらになりたい？小学校の先生・幼稚園の先生」は将来、教師を目指す学生たちにとって、理論と実践のバランスが取れた具体的な指針を示してくださいました。

小川博久先生は、2007年に開催された〈保育学会60周年記念シンポジウム〉「幼児の生活の危機をめぐって－保育の立場でどう取り組むか－」において「幼児の食と睡眠を中心に幼児の生活そのものを問い直そう」と呼びかけられました。「大人たちの生活の変調は今や、幼児の偏食や体調不良、夜更かしなどによる幼児たちの身体や心までも蝕んでいるのではないか、それこそ幼児の生活危機ではないか」という問題提起は、少子高齢化の日本社会への警鐘でもあり、こども学科としても、地方における実態調査に基づく具体的な改善策を呈示し、保育士となった卒業生たちが現場でそれを実践できればと願っております。

諸岡康哉先生は、金沢大学教育学部附属園長時代に「友だちとかかわり合いながら創る生活」という研究テーマに取り組み、ともすると否定的に捉えられるトラブルまで再検討され、それを子どもの発達・成長にとって大切なものとして位置づけられました。トラブルを通して生きる力を身につけることは幼稚園だけではなく、小学校という集団教育の場でも同様でありましょう。子どもたちが小さな胸を痛めて葛藤する様子は、紹介された『学級革命－子どもに学ぶ教師の記録－』からも窺い知ることができます。同書は現在でも、「生活綴方教育実践の歴史的一例」「教師の原像・教育の原点」等と高く評価されています。

2件目の「子どものこころと親の役割」は、少年犯罪や不登校といった現象の奥にある心の問題について、豊富なカウンセリング経験に基づく実証からお話してくださいました。

山中康裕先生の『少年期の心－精神療法を通してみた影－』（中公新書、1978）は児童期・思春期の精神・心理療法における古典的名著とされ、2007年で第23版を重ねて読み継がれています。少年期の神経症の7事例を通して内面に迫る内容で、箱庭・絵画・写真・手紙等、様々な表現手段を用いて子どもたちが徐々に治癒していく過程が記録されています。甘やかす訳ではないが、気長に付き合い待ってあげる余裕が大切であることが分かります。

本学教員からは、こども学科7件、スポーツ学科2件の研究成果が寄せられました。

どうぞ高覧ご批正くださいますよう、宜しく願い申し上げます。

2010年3月吉日

編集委員長 馬場 治

《投稿された論文等に関する著作権は基本的に人間科学会に帰属します》